

# 自信を引き出す体験

大学で新入生対象にカエルをテーマにした授業をやっている。ハードなのに毎年十倍近い履修希望がある。学ぶことは面白い、と体感できるからだろう。

最初はカエル情報満載のオリエンテーション、カエルの観察会、そして解剖。ここまでが私がリードするが、その先は学生が主役だ。最終目標は、全員の前での学生による講義。それに向けてグループで討議し、テーマ、文献収集、教材の作成……。すべて自分たちで設計し、授業の展開まで考えることが求められる。学生にとっては未知との戦いだ。

教えを復唱すればよかった高校までのやり方は通用しない。いや、応なく自分で体験し、自分で考えるラーニング(自ら学ぶこと)を迫られる。

先輩のレベルを超えないといけないというルールもある。最後は二、三日、徹夜しないと合わないのが普通だ。

北海道大大学院教授 鈴木 誠さん



インタビュー

すぎき・まこと 北海道大大学院教授。民間企業から公立中学校、高校教諭を経て現職。専門は理科教育、教育評価、解剖学。学ぶ意欲を引き出す授業デザインを研究。著書に「学ぶ意欲の処方箋」など。56年、東京都生まれ。

学ぶ意欲が目覚める。

狙いは、これからの社会で求められる問題解決能力を育てることにある。これからは知識や技能など狭義の学力のほか、情報収集やコミュニケーションの力、特に学ぶ意欲が不可欠だ。

徹底してラーニングを求めるところでそうした力が育ってくる。

学びのエネルギーとなるのは、解剖から最後の授業まで徹底してこだわる実体験だ。例えば肝臓の門脈を知識として覚えるのと、解剖して血管のクニユクニユとした柔らかさを実感するのでは、情報の質、量が格段に違う。体験の裏付けのない断片的知識は、展開力に欠ける。

こうした問題解決能力の基礎は小さいときから育てる必要がある。

高校生の科学的応用力世界一のフィンランドでは、知識は体験を通して獲得するという考えを徹底している。

フィンランドでは、小学校で図形を学ぶのも、森で三角や丸の葉っぱを集めるところから始める。慣れ親しんだ森の体験をベースに、学びにつながるプログラムができている。学ぶことが身近な生活が重なっているところがすごい。

何度か訪れたが、先生は、子どもの答えが正しいかどうかよりも、なぜそう思うか、自分の考えを言うことを大切にしている。「私たちのやっているのはティーチング(教え込み)ではなく、子どものラーニングだ」と言われたのが印象的だった。

日本の学習指導要領に当たるナショナル・コア・カリキュラムには「学ぶことへの欲求を刺激することから始まる」とある。生徒が自分で課題を見つけ、自ら解決する力を育てようという点で一貫している。

もちろん、学ぶ欲求を刺激できるのは、それが可能な仕掛けを提示できるフィンランドの教師の指導力が高いからだ。

学ぶ意欲に欠ける日本の子どもの調査をしたことがある。彼らは、教科書に載っている写真は教科書だけの世界で、現実と懸け離れたものと受け止めていた。勉強することが自分の生活とつながっていないのだ。

知識や技能が大切なのは当然だが、それだけでは済まない。求められる問題解決能力を育てるには、学ぶ意欲を刺激する体験の機会とそれを生かせる高度な教師力が不可欠だ。

## 教育を考える